
MOON-4 夜叉 3 < 2 1 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 3 <21>

【Zコード】

N1531Z

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

新宿で桜に記憶を奪われた秀に襲われた裕希。それを救つたのは叔母市子から裕希のSPを依頼された早坂 充刑事だった。

MOONシリーズ 第3段『夜叉 3』4話目突入です。

4・夜叉・1（前書き）

ちょっと就職支援所へ今週は通いづめで新作のネタが浮かびませんでした（一¥）

秀と別れた後、裕希と早坂は都庁通りを歩いていた。

先刻から新宿の話しを裕希は早坂にしている。

「じゃ、その不破和人つてのが現『帝王』で彼に倒されたのが九桜。そして、連續殺人事件はその九桜つて奴の一族が九桜からの血をもらえなくなつたから人間の血を奪うようになつたつて訳？」

「うん。簡単に言うとそう。普通はね、和人がこの新宿に結界を張つていて他から『普通の人』が来ない様にしてるんだ。特に夜はね。だけど、時々九桜の側の強い血を持つ者が、他からこの街へ人を呼び寄せるんだつて。」

「それで、餌食になつてしまつて訳。」

「そう」

そこで裕希は思案し、「でも、俺の見た所『帝王』-----和人がいなくてもこの闇の均衡は微妙だけど保たれている。」

先刻のホテルでの吸血鬼たちを思い起こす。

「でも、その和人つて香木で倒されたんだろう？」

歩きながら早坂が言う。裕希は、

「確かに桜の樹木から作られた香木は帝王の命をも奪うつて朝子さんは言つてたけど。」

「その桜つて子の目的つていうのは、和人-----『帝王』を倒して自分が『帝王』になる事なんだろう？」

早坂の問いかけに、

「でも」

裕希は、「そうしたら、秀さん関係ないじやん。桜は秀さんが『欲しい』って言つてたんだよ。」

「裕希くんが共有する和人との『記憶』に何か心当たりはないのかい？例えば、『帝王』を復活させる方法とか。」

「判らない。」

裕希は歩みを止め、首を振った。「でも、大京町のマンションで秀さんに襲われた時、確かに和人の声が聞こえたんだ。」

「それじゃ」

早坂も歩みを止め、「不破和人……『帝王』は死んでいないって事?」

「そうだつたらいいけど……」

裕希は少し俯いた。

でも、自分は確かに見た。

桜の刺した香木が和人の左胸に刺さり、決して目を開けなかつた事。

「…………何処かで『眠つてる』だけなんだ、きっと。そうでなければ、もつと『闇』が均衡を保てず『混乱』に陥つてはす。」

そこで一呼吸置き、「3ヶ月前程、『連續通り魔事件』は増えていない。」

「それもそうだな。」

早坂も同意した。

確かにその手の『事件』は3ヶ月程前より少なくなつていて。

「もう、桜が『帝王』となつて『闇』を支配したんじゃないのかい? 裕希くん。」

「だつて、そうしたら今度、本当に和人が倒されていたら、和人の一族が『混乱』に陥るでしょ? 人の生き血を求めて。」

「それもそうだな。」

早坂は髪をかき上げ、「じゃ、『帝王』は何処に。」

そこへ、何処からか桜の花弁が舞い落ちて来た。

「何だ、この季節に」と、言つた途端、

ズンツ・・・・・・

早坂は後頭部に激しい痛みを感じ、そのまま路上にひれ伏した。

「早坂さん！」

何が起こったか最初裕希には理解できなかつた。

ただ、降り注ぐ桜の花弁が少女の降臨を意味していた。

天空高く浮かぶ月を背景に、少女は中空にいた。

そして、いつの間にか周囲には紅の瞳が無数、集まつていた。

「人質。」

青年……榊は、早坂の腰の拳銃を取り、彼の頭に銃口を突き付けていた。

「いつの間に！」

裕希は2人を見比べた。「これ以上、何が望みだ、桜！」

「あなたの中の『和人の記憶』よ。」

「！・・・・・・・・」

「甘い坊やだね。」

榊はセイフティ・ロックを解除し、「どうする?」こいつは人質がいるんだけど。」

「そんな事言つたつて！」

裕希は天空に向けて叫んだ。「俺だつて『全て』を知つてる訳じやない。榊、早坂さんに手を出さないでよ！」

そう言つと、裕希は都庁通りのガードレールに飛び乗つた。

「これ以上、犠牲者が増えるなら和人も俺の中にある『和人の記憶』を『封印』したいだろう。」

そして、榊を見降ろし、「早坂さんを離せ。じゃないと、ここから飛び降りる！」

眼下には都庁の広場が広がつてている。
深い闇に包まれて。

「どうする、榊！ 桜！」

「お嬢。」

榊は静かに言つた。「どうやらこの坊や、本気らしげぜ。」

「別にあなたは欲しくないわ……」

桜は悠然と言つた。「私が欲しいのはあなたの中の『記憶』だけ。」

桜は右手を上げた。

一斉に紅の瞳が裕希を襲いつ。

「こいつら！」

裕希は戸惑つた。万事休す・・・・・・

その時、桜の花弁が彼を取り巻いた。

視界が遮られる - - -

次の瞬間。

「ここよ。」

桜の声が背後から聞こえた。

「え。」

振り向くと同時に、裕希の額に彼女の人差指が突き立てられた。

「！・・・・・」

裕希は体のバランスを崩し、背後の都庁広場の闇の中へ落ちていった。

自分を取り巻く桜の花弁と共に - - -

4・夜叉・1（後書き）

『BABYLON』も『ジャパン』も忘れていません。たぶん、次は今月中に『ジャパン』を書けたらいいと思います（番外編があって本篇なしじゃね〜（滝汗））

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531n/>

MOON-4 夜叉 3 < 2 1 >

2010年10月15日22時08分発行